

かみさまのこうえん

大人な観光地における子供のための遊び場 202049 藤井 結明



出雲大社の御祭神・オオクニヌシノミコトは、神々が国を治めた時代よりも前に、国を造るため人々と国土を開拓なさった。それとともに、農耕・漁労など山や海などの営み術や、病気や災害を防ぐ術などを人々に授けられ、人々の日々の暮らしのすみずみに至るまで幸せの種時きにお励みになされた。そしてオオクニヌシは、国づくりなされた国土をアマテラスに「国譲り」なされた。目に見えない神の世界や行事をまとめ、神々の世界をお治めになられる大神として、称え、大神様のお住まいを多くの神々が集われ築かれた。それが出雲大社である。

しかし出雲大社に訪れるだけでは、オオクニヌシのことやここがどんな場所なのかが分かりづらく想像することも容易ではない。そのため出雲大社は子供には難しい観光地であるといえる。神様のいる場所を子供がより楽しめるように。出雲大社を体感できるように。

かみさまのこうえんが完成するまでの話。

01 研究のきっかけ

小さいころの自分の写真を振り返ってみるとつまらなそうな自分が写っていた。どれも歴史的観光地で撮ったものばかりである。それはおそらく、ただ訪れて見るだけの観光だったから。建物や歴史を歩いて見ることに飽きていた顔だった。もし歴史的観光地を子供のころから楽しめていたら、知識や興味の幅が広がり新たな自分が生まれていたのではないだろうか。私のような子供たちが歴史的観光地を楽しむためにはどうすればいいのだろうか。ランドスケープでなにかできることはないか。

02 研究背景

02-1 大人な観光地とは

歴史・文化遺産、建築、美術館などその場所にたたずむものを見て感じる事がメインの場所とする。また、子供向けに作られていない場所。昔から変わらずあるもの、現代にはない歴史的な価値を感じるためのものも含まれる。

02-2 大人な観光地において、子供が少ないのはなぜか

kids	adult
遊ぶ場所が少ない・知識や興味が少ない・受動的に訪れている	知識や興味を持っている・主体的に訪れている

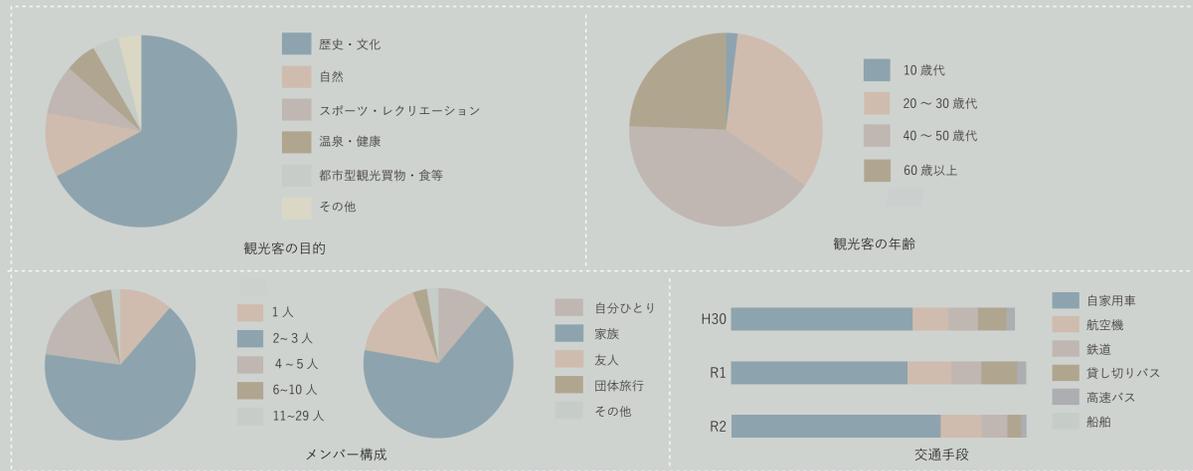
大人な観光地では子供が楽しめるというイメージが少ないため、小さい子供連れの観光客は親子で一緒に楽しめる場所に行く傾向がある。大人な歴史的観光地においての子供と大人の違いは、大人は興味や知識を持つことで主体的に訪れているのに対し、こどもは親に連れられて受動的に訪れているケースが多いことである。子供が歴史・文化・建築などに知識や関心を持ち始めることで、子供の興味の範囲が広がり成長により影響をもたらす。また、家族との会話のきっかけも増え、かかわり方も変わっていく。子供の知識・関心・興味が広がる、家族と会話が増えていく。

02-3 大人な観光地の子供のための事例

本来は見るだけであった場所に、場所を体感することができる仕組みを取り入れることで、大人な観光地でも子供が楽しめるようにしている事例がいくつかあった。例えば新潟県佐渡市の佐渡金山ではVRで過去に戻り昔を体験できるようにして歴史を体感させていた。また全国各地で行われている「戦国宝探し」というイベントでは、地域内の様々な歴史ある場所に訪れてもらうための謎解きウォークラリーで、子供やその地域を盛り上げていた。このような成功事例から子供に知識がなくても現地で十分に楽しませるために何かを体感させることが成功につながっていくことがわかった。

03 島根県出雲市の観光データ

03-1 観光実態調査



03-2 調査の概要

出雲市に訪れる観光客は「歴史・文化」「自然」を目的とする人が多く、そのほとんどが20歳以上だった。10代の割合は少なく出雲にあまり訪れていない。このことより出雲は大人な観光地と言える。他の項目では2～3人で訪れる割合が高く、家族が友人と訪れる人と、車で訪れる人が過半数を占めていることが分かった。この調査結果から卒業制作では「車で島根に観光に来るこども」を対象に進めていく。

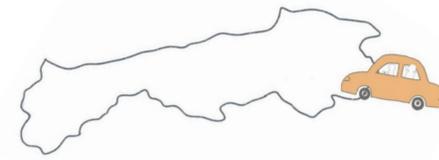


04 計画内容

04-1 ミッション

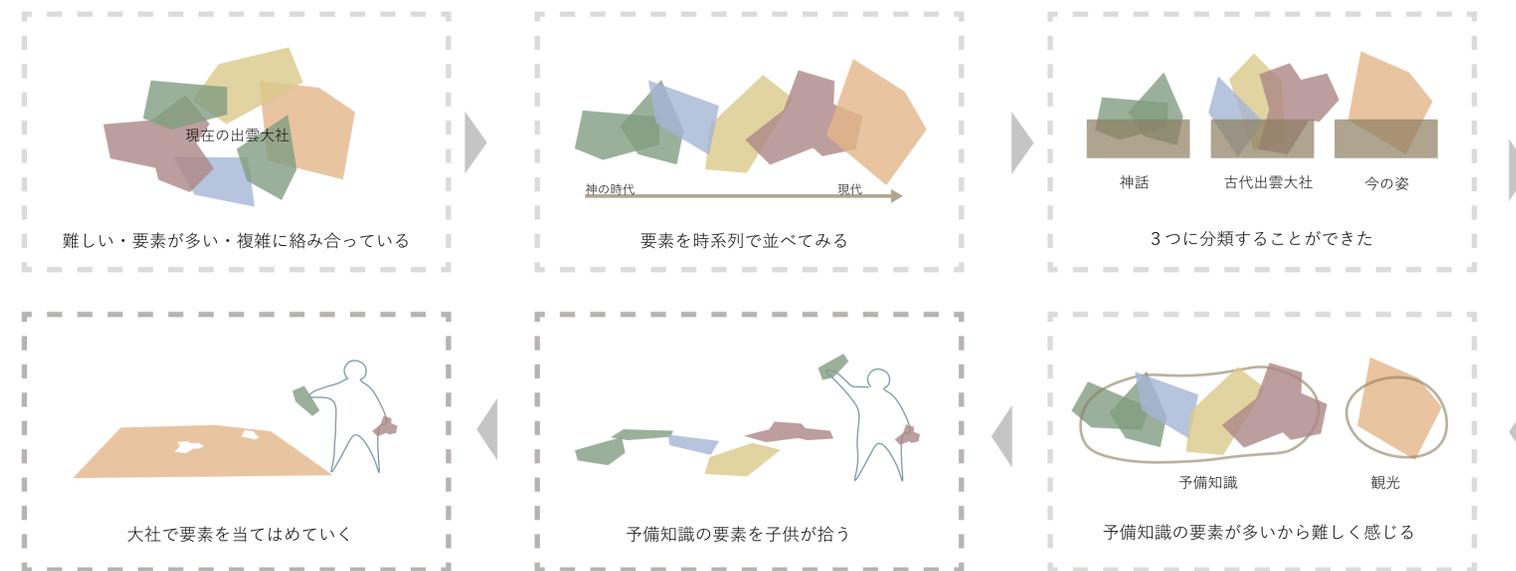
大人な観光地における子供のための遊び場を制作する。そのモデルケースとして出雲大社を選定する。出雲大社は神の時代に創られた歴史がたくさん詰まった大人な観光地であるといえる。そんな出雲大社で子供が楽しく観光することができるように、計画を行う。

モデルケース	島根県出雲大社
対象地	出雲大社への経路上の敷地
対象	車で訪れる観光客とその子供



04-2 どのようなことを行うのか

出雲大社に訪れる人をターゲットとし、出雲大社に訪れる前の「あそび場」として設計をする。「あそび場」であそぶことで、出雲大社に行ったときにリワークワクして観光を楽しめるようにしていく。出雲大社の伏線になる何かを「あそび場」に落とし込んでいく。



05 敷地選定と方法

05-1 前提・条件

県外から出雲大社に車で訪れる人は、出雲インターチェンジで一般道に乗り換える人が多い。出雲ICから出雲大社までの動線を考え、その最中に行きやすい場所が最適となる。出雲大社内に「場」を設けて観光を完結させるよりはかは、出雲市内に計画することで出雲市内の周遊型観

光客が増えることも期待する。また最後の休憩場所としても利用してもらいたい。候補地として挙げたのは、出雲大社行きシャトルバスの発着地点となる「浜山公園」と出雲インターから降りてすぐにある「真幸ヶ丘公園」の2箇所。



06 現状調査

06-1 対象敷地概要

真幸ヶ丘公園



面積 / 10.8ha

公園概要 / 戦後、この丘に桜や雲仙、さつきを植えられ、桜祭や雲仙さつき祭も行なわれていた。平成4年にはスポーツ広場や展望台、日本庭園が完成し出雲市立の大公園となり、市西部の憩いの学園として市民に親しまれる公園となった。

しかし、現在は展望台や日本庭園はさびれ、広場にも人気がない。散歩道も崩れた箇所が見当たり、通行止めの道も増えている。芝生広場には遊具があるが、道がわかりにくいため、草むらと化している。



06-2 平面図・現状解析



魅力



滑り台からの景色



木々の間から見える川



展望台から見える景色

課題



広がる竹林



ぼこぼこの地面



辺鄙な場所にある広場

多種多様な植物と田舎ならではのどかな景色を一望できる公園だが、公園内は通行止めの道や劣化している場所が増えており、綺麗とは言えない。しかしアクセスはよく立地は良好。

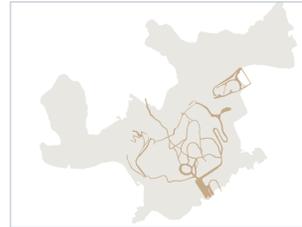
07 土地利用計画

07-1 レイヤーによる土地利用計画

管理用道路と遊歩道を分け、安全に道を進めるように設計。



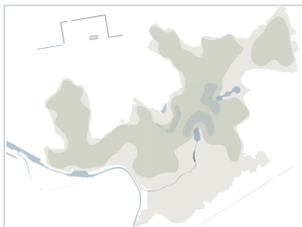
管理用道路



遊歩道



近隣住宅



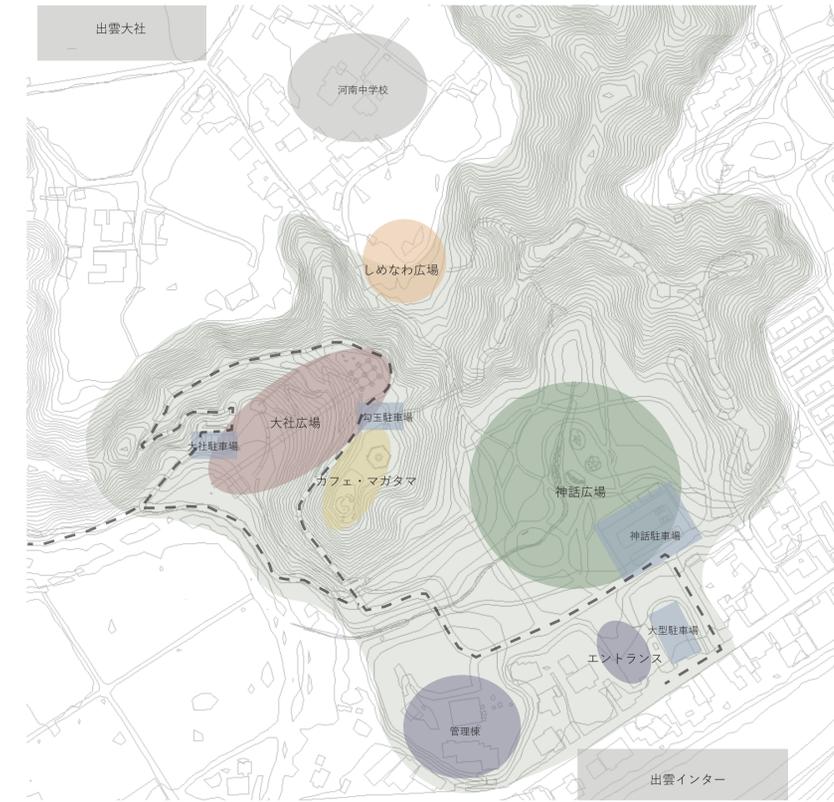
河川

08 詳細計画

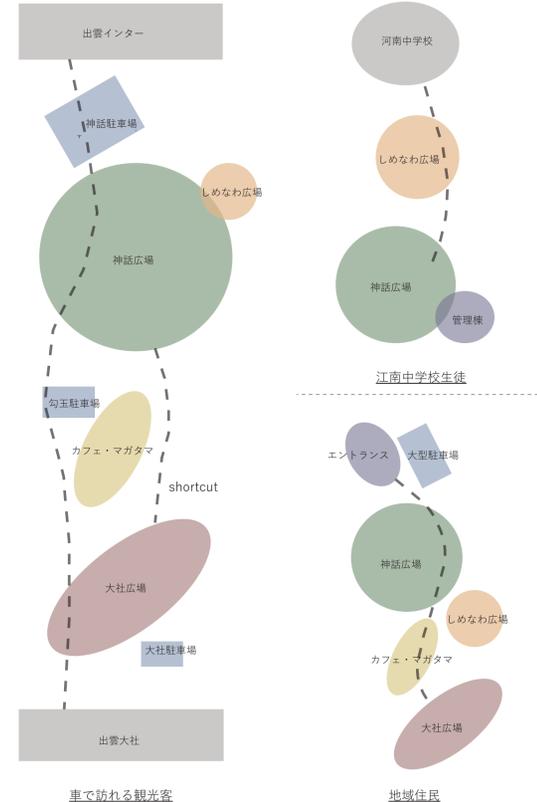
08-1 ゾーニング

出雲大社を体感してもらうために、まずは神話広場で神話を体感し、勾玉の形の花畑があるカフェで休憩する。最後に大社広場で出雲大社の神様に触れる。大社のストーリーを順番に体感することができる動線計画にした。しめなわ広場は中学校と近いことと谷間の広場に水がたまることから水田を計画した。

ゾーニング



動線



8-2 駐車場設計

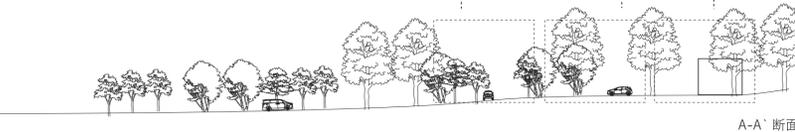
緑に抱かれた感覚を与える



目線を緑でさえぎり、緑量を感じさせる。

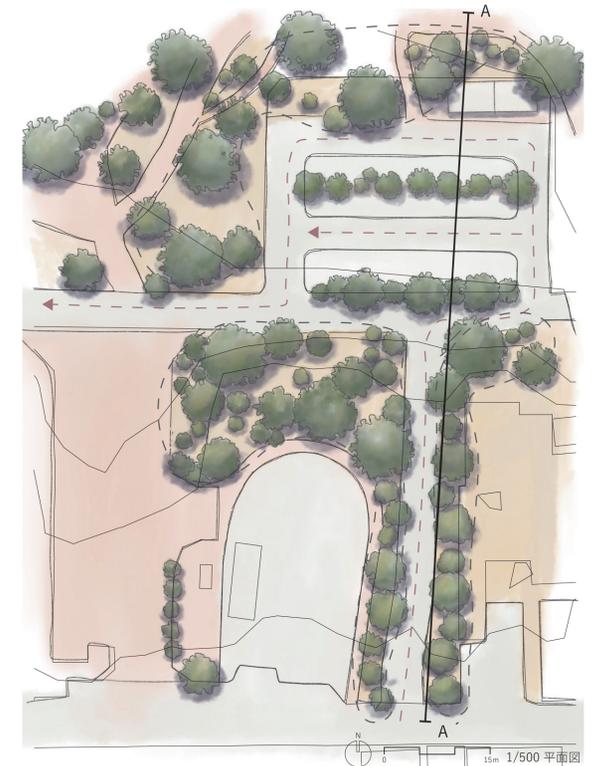
緑陰駐車場

トイレの背景は常緑の森とし、神聖な雰囲気演出する。



A-A' 断面図

既存の駐車場の場所から北に移動させることで広場に行きやすくなり、トイレ休憩などで到着した観光客を誘う。少しだけ広場で遊ぼうといった寄り道意識が生まれていく。駐車場周りには駐車場という人工物を覆うように常緑の森をつくることで神聖な雰囲気を作り出す。道路から駐車場までは直線の道にし、並木を作ることで神聖な雰囲気を感じることができる。地域住民が遠足などでも利用できるようにバス専用駐車場を隣接した。



1/500 平面図

神話広場

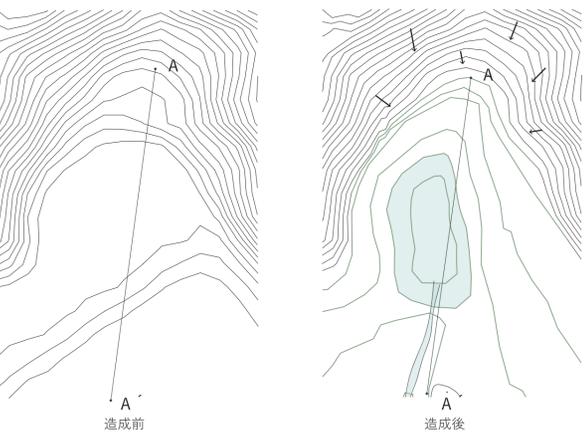
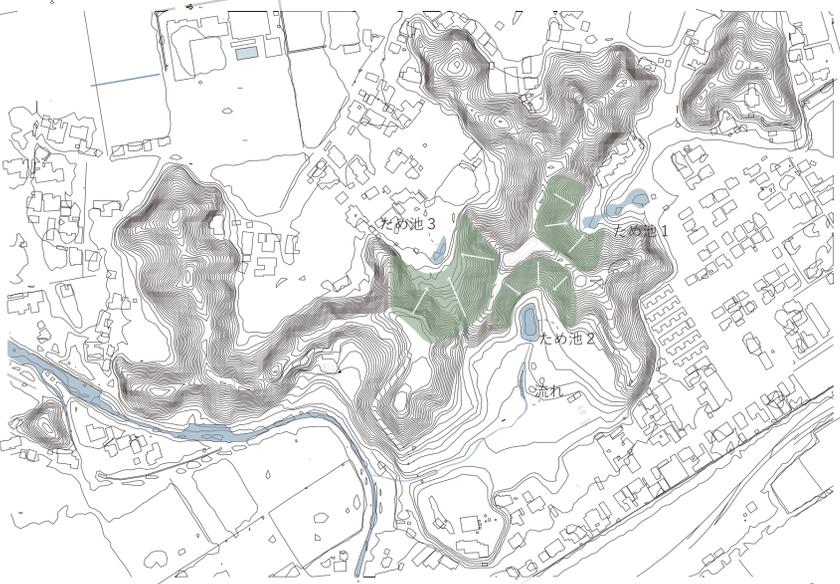
日本最古の歴史書、古事記に登場する神話「ヤマタノオロチ伝説」と「因幡の白兔」。これらは出雲に深く関連している。

神話広場のゾーニング

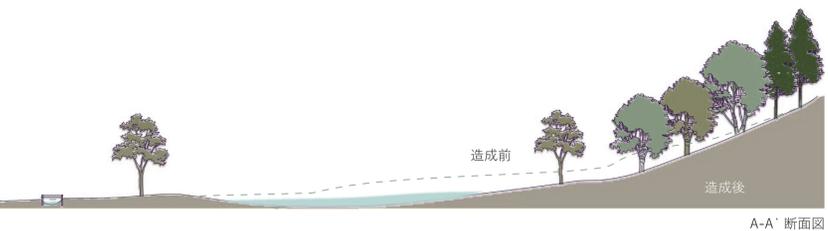


古事記には「ヤマタノオロチ伝説」、「因幡の白兔」の順で登場する。「ヤマタノオロチ伝説」ではスサノオが島根県仁多郡奥出雲町にある船通山に降り立つことから始まる。そのためヤマタノオロチ伝説の広場は山のふもとに計画する。島根県に流れる斐伊川がヤマタノオロチと言いつがれていることから斐伊川のような新たな水の流れを計画する。「因幡の白兔」ではウサギが海を渡る様子が描写されている。その海を渡る様子を風景に落とし込むためにウサギが渡れるような浅瀬の川を計画する。広場の北側にある谷を利用し水系計画を行った。

水系計画



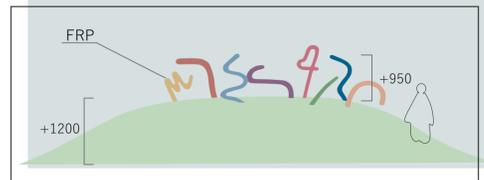
既存の谷の等高線の間隔を狭めて、傾斜をきつくすることで雨水がたまりやすくなり、ため池ができやすくなる。ため池のサイズは防災時の貯水湖の役割も考慮し設計した。



ヤマタノオロチ伝説

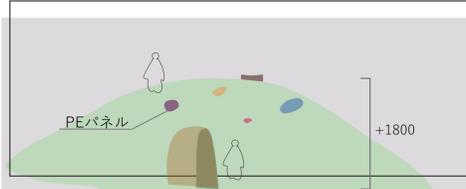
昔、出雲の山間部には「ヤマタノオロチ」と呼ばれる巨大な怪物がたたずんでいた。その目はホオズキのようで、ひとつの身体に頭が8つ、尾が8つ、その身体にはコケやヒノキやスギが生え、その長さは8つの谷、8つの山に渡り、その腹を見ると、一面がいつも血にまみれてただれている。そのヤマタノオロチを退治したのがスサノオノミコトである。スサノオは父とケンカし、古里から追放されてしまった。その後にとどり着いた島根県出雲市の斐伊川上流にある船通山でのお話。

A-暴れるオロチ



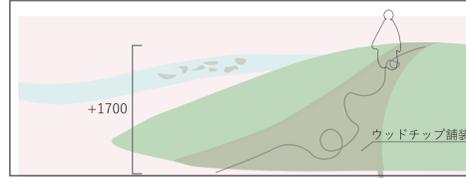
船通山でスサノオは、オロチの生贄にされそうになっていた美しいクシナダヒメと出会った。オロチは年に1度やってきては、ヒメの姉妹を食べていた。スサノオは、ヒメの親に「娘をくれるなら、ヤマタノオロチを退治してやる。」と言った。この丘はそのオロチが暴れる様子を表している。

B-酒壺で酔っぱらうオロチ



スサノオはオロチを倒すため、老夫婦に醸した強い酒を造るよう命じ、垣に8つの入口と棧敷を設け、その上に酒樽を置いた。酒を桶に入れて待っていると、山鳴りとともに、オロチが現れた。良い香りの酒につられ、オロチは8つの桶それぞれに頭を突っ込んで飲み、酔って眠ってしまった。その時、スサノオはとびかり切り散らした。ここでは思わず入りたくなる酒樽を表した。

C-オロチ退治

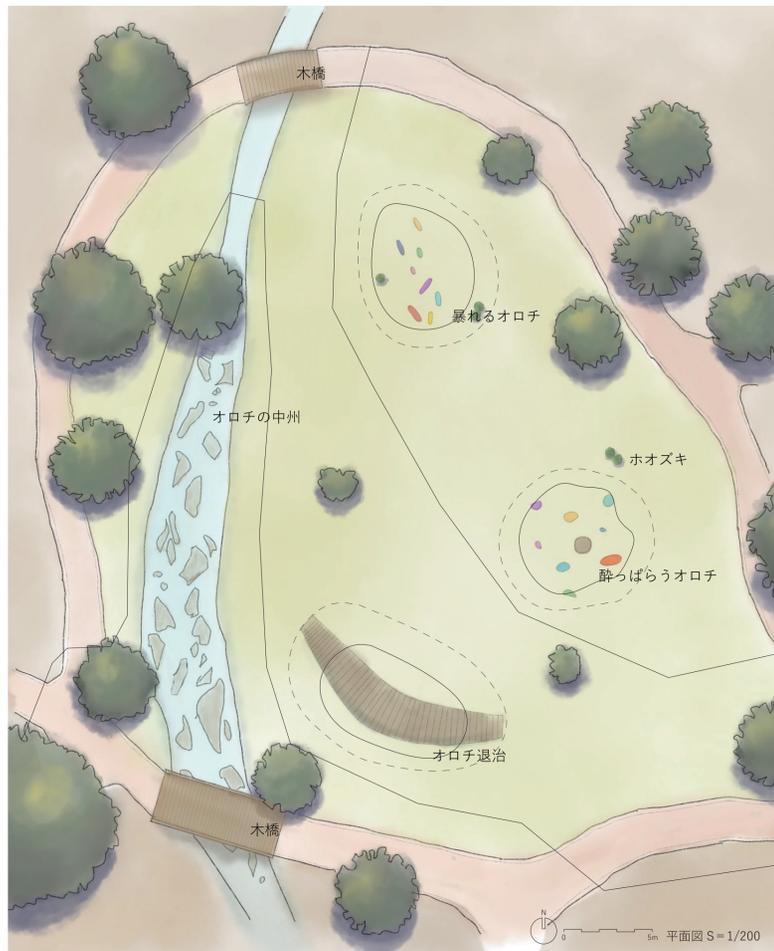


オロチを倒すことができたスサノオは出雲に須賀宮を建て、クシナダヒメと結婚した。倒したオロチを川に見立てて丘の上から見下ろせるように計画した。

生き残るヤマタノオロチ

古代からたびたび氾濫を繰り返しておそれられた斐伊川がオロチの正体ではないかといわれている。スサノオが降り立った地は斐伊川の源流である奥出雲でたたら製鉄の本拠地であることから、オロチ伝説と深く繋がっているといった見方もある。たたらに必要な木炭を取るために木を大量に伐採し、そのために洪水が起きた。鉄の原料である砂鉄を取る時に川が赤く濁ったため、下流の斐伊川周辺は被害を受けた。奇稲田姫は田んぼのものを象徴し、砂鉄や洪水で氾濫する斐伊川（オロチ）が毎年田んぼを破壊したといわれている。ここで斐伊川に眠るオロチのような流れとオロチの中州を再現する。

おろち広場には3つの丘がある。それぞれが「ヤマタノオロチ伝説」のストーリーを表してある。広場に訪れる子供はスサノオとして、神話の中の世界で遊び、神話の世界を体感する。



因幡の白兔

ウサギがサメのせなかを伝って対岸に渡る様子を表現する。



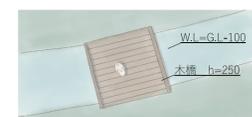
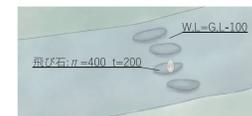
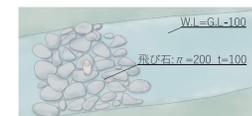
Story
因幡
私と
りな
は渡
まし
した
るを
体を
体が
やが

大社にあるうさぎの銅像

出雲大社境内では社務所の南東に位置する「ご慈愛の御神像」と呼ばれる「因幡の素戔」がモチーフとなった大国主大神さまとウサギの青銅の御像があり、現在66羽のウサギの石像がある。出雲大社の入り口や本殿の裏、近くの歴史博物館の庭にも様々なところにいる。神話広場にいるウサギと触れ合ったのち、出雲大社に訪れたくさんのウサギを目にすれば、この土地にはウサギとかわり深いことに気付くのではないかと。



設計詳細・管理方法



ウサギがサメをだまして対岸に渡る様子を広場で表現する。3パターンの川を渡る方法がある。サメを具現化した大きい石橋と比較的安全な小さな石橋、安全な木の橋。使う石にはなるべく平らなものを選ぶ。川はウサギの足が少しつかるとの浅瀬にし、流れも穏やかにする。そのために広場の上流でささやかな堰止めをつくり、広場を流れる川の傾斜を緩やかにする。広場には芝生を敷き、防虫剤などをまかず、草刈りなどのメンテナンスを行いながら、自然の力で育てる。

神話広場における植栽計画

オロチの目のような赤い「ホオズキ」

オロチの目はホオズキのように赤いといわれており、ホオズキを広場に植えることでそれを再現する。ナス科ホオズキ属の多年草。鮮やかなオレンジ色の果実、草丈50～90cm程、地下茎で増えるので群生している。冬には地上部は枯れてなくなる。



カフェ・マガタマ

スサノオノミコトがヤマタノオロチを退治した後、“まがたま”をアマテラスオオミカミに献上したことから三種の神器の一つである「八尺瓊の勾玉」になった。
車での移動で疲れた体を、神秘的な勾玉の形をした花畑が癒す場。



という国に白いうさぎがおりました。ある日、対岸に渡りたいウサギはサメを騙して『サメさん、一族の数を数えませんか。サメさんが一族を引き連れて、対岸まで一列に並んで、私の上を走らぬ数を数えますよ。いざ勝負!』とサメにウソをついて向こう岸に渡りました。しかし、ウサギが終わる前に本当のことをばらしてしまい、怒ったサメに皮を全部はがされ大けがをおってしまった。体が痛くて泣いているところに大勢の神様がきて「海水を浴びて風に当たるように」と言いました。その通りにすると、良くなるどころかもっと痛くなりました。大勢の神様たちはうさぎにいじわ言ったのです。するとそこに、優しい神様がやってきました。泣いているわけを聞くと、「真水で洗いガマの穂をほぐしたところ寝っ転がりなさい」と言いました。うさぎが言われた通りにするとすっきり良くなりました。

優しい神様は大国主命と呼ばれるようになり、人々からたいそう大事にされるようになりました。

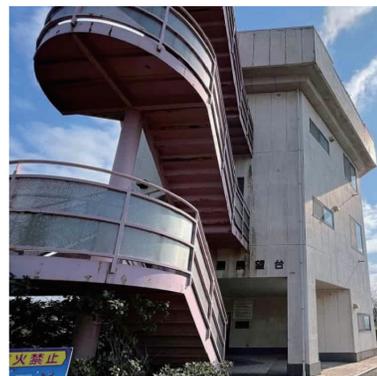


ウサギの傷をいやした「ガマ」

ウサギの皮膚を治癒したと言われているガマの穂。中が綿になっていることが特徴で、子供たちの興味を引く。茶褐色の雌花部分は弾力があってふんわりと膨らんでいる。穂状ことからガマの穂と呼ばれている。ガマの穂の大きさは10cmから20cmほどで、太さは2cmから3cmほど。群生しやすい。



展望台の使用法・再構築について



左：広場全体像 右：展望台正面



現状と改善策

展望台後方には広い空間があるが、地面は芝生シートでつぎはぎに覆われており、歩くとトランポリンのように柔らかい感触が足に残る。奥に行っても高さのある生垣で囲われているために景色は見えず無駄な空間になってしまっている。そのような空間を花畑として生まれ変わらせる。展望台から進んだ先には勾玉の形をした花畑がある。出雲型勾玉は約2600年前の弥生時代から出雲に伝わる形と言われる。

展望台は現在は使われている様子がなく、殺伐としているため改修を行う。また車の運転や移動で疲れた人々を花で癒し、展望台で少し出雲の食べ物を楽しんで観光に旅立つ。最後の休憩所。

春 2～5月	夏 5～8月	秋 8～11月	冬 11～2月
内：ヒヤシンス・スイセン 外：ピオラ	カスミソウ・アンゲロニア マリーゴールド	アンゲロニア・コスモス マリーゴールド	パンジー、ローズマリー ピオラ・クリスマスローズ

展望台から勾玉の花畑までに続く約20mの長さのある花道に傾斜をつけることで花畑がより美しくきれいに眺めることができる。また傾斜によって奥にある勾玉の花畑がくすかに見える程度になり、来園者は興味をもってわくわくしながら勾玉花壇にいざなわれる。

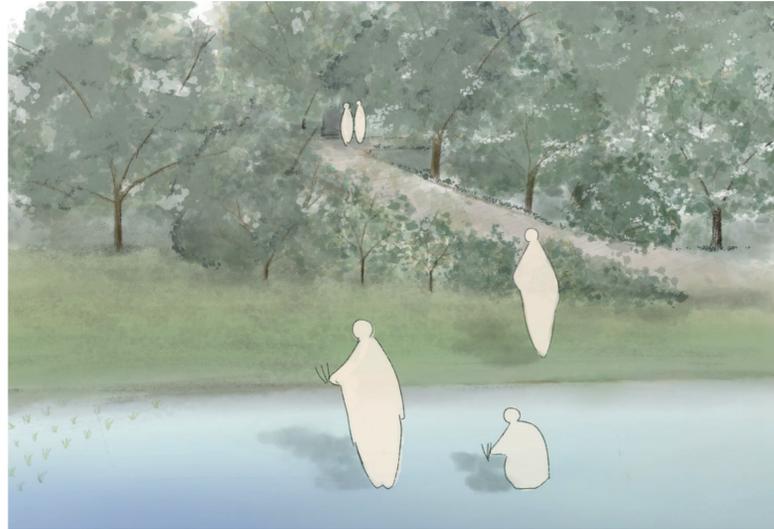
4F	展望台	出雲市を一望できる展望台や勾玉の花畑だけでなく、遠くには出雲ドームや日本海も見ることができる。
3F	コミュニティスペース	近隣の幼稚園や小学校、中学校の生徒の展示や近隣住民の展示。地域の交流の場としても使える。
2F		
1F	飲食店	出雲そばやシジミ汁、さざえおにぎりなど地産地消をメインとしたメニューを提供する。

1階部分には新たに飲食店を、2、3階部分はコミュニティスペースとして飲食や展示などができるようにした。飲食店では観光前に訪れる人を対象に軽食などを用意する。コミュニティスペースは飲食することだけでなく、地域に住む人との交流や展示を見てもらうなど企画を催す。観光客と地域に住む人とのかかわりを大事にする。

しめなわ広場

出雲大社のシンボル、大きなしめ縄は県内で時間をかけて作られている。しめなわを稲から育て作っていくことで学んでいく。

校外学習



真幸ヶ丘公園の北側にある広場は観光客と江南中学校の生徒とのかかわりの場として田んぼを計画。出雲大社のシンボル、大きなしめ縄は島根県民が数年かけて稲から育て作りあげる。それらの作業は大変なものである。学生が実際に作ることで、島根県に誇りを持つ。北側広場は谷の延長線上にあり、水気がたまりやすい。その特性を生かし、田んぼを設計する。田んぼでは赤穂モチという古代米に近い品種のものを育成する。



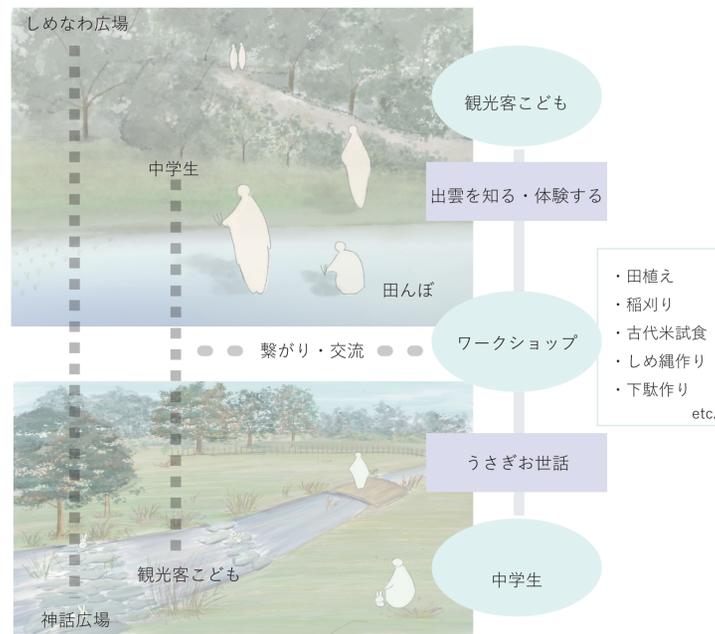
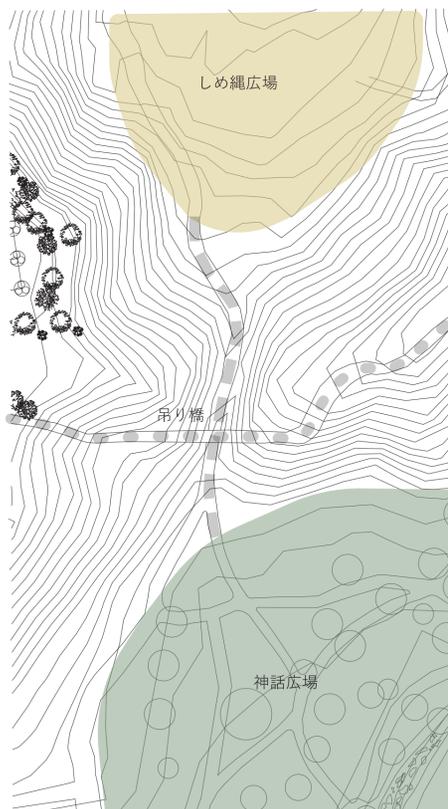
古代前に近い品種の赤穂モチ

神門横穴群

公園の丘陵部にかまぼこ型や家形をしたものがある。約1400年も前のお墓である。遺跡ということもあるため切土は基本的に避け造成を進めていく。



シークエンス

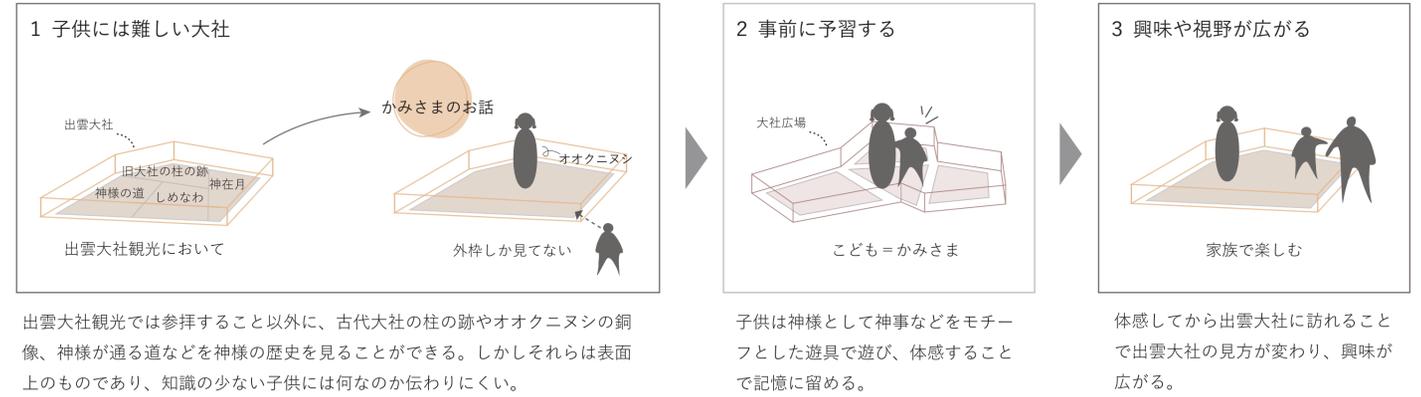


神話広場としめなわ広場がこの道でつながっている。頭上の吊り橋と道が狭くなることで双方を反対側に導く。中学生が育てた赤穂モチの藁を用いてしめ縄や下駄作りを行う。またタテのつながりを持つ場として、中学生が幼稚園児や小学生、地域住民、観光客などにワークショップを開催する。

大社広場

出雲では11月は神在月と呼ばれたたくさんの神様が出雲を訪れ賑やかになる。

計画ダイアグラム



イ 稲佐の浜



稲佐の浜は出雲大社の西方1kmにある海岸で、国譲り、国引きの神話で知られる浜である。浜辺の奥にオオクニヌシとタケミカヅチが国譲りの交渉をしたという屏風岩があり、海岸の南には、国引きのとき、島を結ぶ網になったという長浜海岸が続いている。神在月になると、八百万の神々をこの浜でお迎えする。滑り台の着地点に稲佐の浜を表すことで、子供が神様のように訪れる事ができるようになる。この滑り台のスタート地点は開けていて、島根の穏やかな風景を感じながら滑ることができて気持ちが良い。



滑り台から見た景色



稲佐の浜

ロ 4つの鳥居



宇釈迎橋の大鳥居 / コンクリート造



勢溜の大鳥居 / 木造



松の参道の鳥居 / 鉄



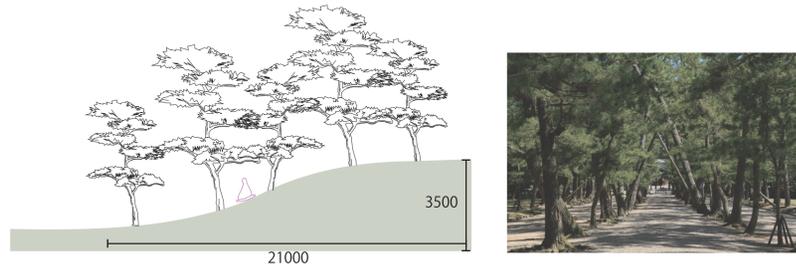
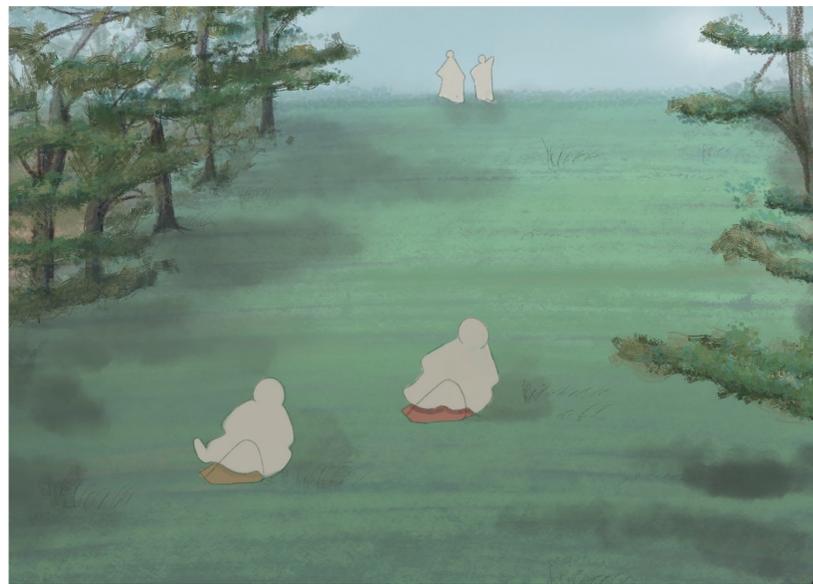
銅の鳥居 / 銅

出雲大社には材の種類や大きさが違う4つの鳥居がある。どの鳥居にも存在感があり本殿に近づくごとに神聖さが増している。それらを広場にも作る。一つつくると小さくなっていく仕掛けと出雲大社と同じように材を変える。



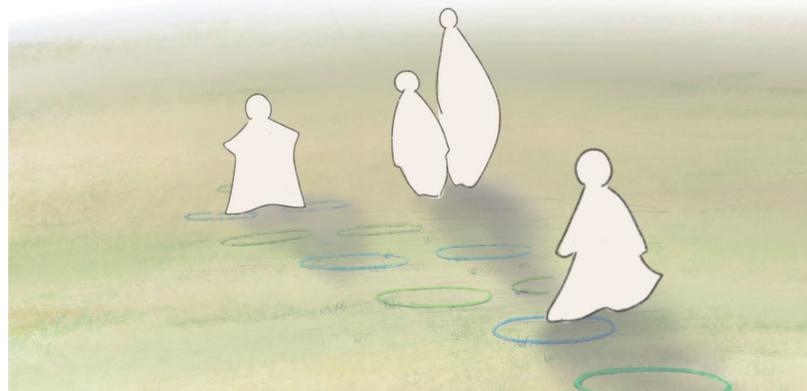


ハ 松の参道



出雲大社の松の参道は下り坂になっている。これは全国的に珍しいことで、すごく記憶に残る神聖な道である。そんな松の参道はそり滑り場となる。松に囲まれた下り坂をさっそうと滑っていく

ホ ご参拝方法



出雲大社の正式な参拝作法は一般的な「2礼2拍手1礼」ではなく「2礼4拍手1礼」である。4拍手をするのは、神様に対し限りない拍手をもってお讃えすることができるからと言われている。そのような特別な参拝方法をけんけんばで遊ぶことでリズムを体感していく。通常のけんけんばではなく、「2礼2拍手1礼」に合わせたリズムで進めるようにする。



ニ 出雲大社本殿

ご本殿につながる階段は108mと長いことが特徴である。しかしそのまま階段を作るのではなく子供が遊びながらその長さを体感できるように108mの長さの遊具と大社を彷彿させる複合遊具を企画した。勾配を考え、元ある地形を利用したことで一番下から見るとかつての出雲大社をよみがえらせるような景色が浮かんでくる。



古代御本殿柱



かつての柱の位置を表している。



古代出雲大社復元模型

古代出雲大社は3本の大木を鉄輪で束ねて1本の柱とし、高さ16丈(48メートル)の御本殿だった。その柱があったとされる位置が現在の出雲大社に記されている。しかし子供にはそれが何なのか伝わりにくいため、大社広場で古代の大社を表した遊具として復刻させる。